

## [目次]

男女共同参画学協会連絡会第3回シンポジウム報告 .....1

### 記 事

I. 次々期会長および次期全国委員選挙報告 .....2  
II. 全国委員会での承認事項 .....3  
III. 書評依頼図書 .....4  
IV. 寄贈図書 .....4  
V. 後援・協賛 .....4  
VI. 地区会報告 .....5

### お知らせ

1. 公募 .....13  
2. 関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ .....13  
3. 第9回マリンバイオテクノロジー学会大会 .....14

書 評 .....14

日本生態学会役員一覧 .....15

京大大学生態学研究センターニュース

# 日本生態学会ロゴマーク募集

日本生態学会会員 各位

このたび、日本生態学会のロゴマークを制定することになりました。つきましては、会員の皆様からロゴマーク案を募集したいと思いますので、下記の応募要領に従い、ふるってご応募ください。

## 日本生態学会ロゴマーク応募要領

応募資格：会員（一会員一点のみ応募）

応募期限：2006年2月末日（必着）

応募方法：eメールまたは郵送

応募先：生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

E-mail：office@mail.esj.ne.jp

審査方法：新潟大会時に大会参加者による投票を参考に、常任委員会で選考し、総会で応募作品の当否を決定する。

賞 金：採用されたロゴマーク案に対して、賞金5万円を副賞とする。

※日本生態学会の略称は「ESJ」として下さい。

以上

## 50年間会員に対する永年会員表彰制定のお知らせ

常任委員会において、おおよそ50年間生態学会に在籍された会員の方から申し出があった場合、感謝状を贈呈することになりました。希望される方は学会事務局までお申し出ください。

## 男女共同参画学協会連絡会第3回シンポジウム参加報告

可知直毅（将来計画委員長／首都大学東京）

西谷里美（日本医科大学・生物教室）

男女共同参画学協会連絡会（以下連絡会と略記／<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>）の第3回シンポジウムが、設立からちょうど3年を迎えた2005年10月7日（金）にお茶の水女子大学キャンパス内理学部3号館を会場にして開催された。生態学会からは、可知、西谷、大曾根の3名が参加した。今回のシンポジウムのテーマは「21世紀の産業を拓く男女共同参画社会」であった。産業界では、少子高齢化社会における労働の担い手として、また量的生産競争の時代から質的向上が求められる時代への転換期にあたり、多様なアイデアの提供者として女性の参画が期待されているとのことである。産業界を主題として掲げていたものの、議論の中心は、産・学を問わず女性研究者・技術者、更にはその中で指導的役割を担う人材をどうすれば増やすことができるかにあった。

連絡会は2002年10月に自然科学系の学協会が連携して発足し、現在では27学協会が正式加盟、20学協会がオブザーバーとして参加している。日本生態学会は2003年11月20日に正式に加盟した。これまでの主な活動として、約40万人の科学技術系専門職を対象とした男女共同参画実態調査と、それに基づく2つの提言（「科学技術研究者に適した育児支援制度の整備に関する提言」および「研究助成への申請枠拡大に関する提言」）、さらに「第3期科学技術基本計画に関する要望書」の提出などがある。第3期委員長の相馬芳枝氏（日本化学会）は活動報告の中で、文科省の次年度概算要求に女性研究者の活躍促進のための予算が盛り込まれたことなどに触れ、連絡会の活動が着実に実を結びつつあると述べた。

シンポジウム午前の部ではテーマに沿ったアンケートが参加者に対して実施され、それに基づいた自由な討論が行われた。また午後の部でも特別講演、パネルディスカッションをとおして、企業・大学・行政それぞれの立場からの具体的な取り組みが紹介された。内閣府男女共同参画局が取り組んでいる「理工系の女子学生を増やすチャレンジ・キャンペーン」（<http://www.gender.go.jp/c-challenge/>）もそのひとつである。

議論の中でその基礎資料として何度か取り挙げられたのが、連絡会が今年まとめた「科学・技術系の学会・協

会における、学生会員と一般会員の女性比率に関する報告」である。ここでの学生会員とは大学院在学中の人をさす。この報告によれば、調査したすべての学協会において、一般会員の女性比率は学生会員のそれよりも低い。科学・技術系分野に女性が少ない理由としてこれまでは、この分野を志す女性の少なさが挙げられることが多かった。しかし今回の結果は、志を持って大学院に進んでも、女性が専門分野の職につく際には何らかの障壁があることを示唆している。ちなみに日本生態学会では、学生会員の女性比率34.4%に対し一般会員は12.4%である。

ではどうすれば増やすことができるのか。「障壁」の分析が必要である。また意識改革や、女性の登用について数値目標を掲げて取り組むことの必要性、より具体的には、女性がリーダーを経験する場を作る、中高生に科学技術系で活躍する女性の姿をみせるなど様々な意見や取り組みが紹介された。意識改革の面では、家事育児に関する役割分担の固定観念ばかりでなく、「忙しい事は良い事」とする（特に男性の）働き方も見直すべきであるという指摘があった。数値目標を設定した取り組みでは、その成功例として日本学術会議が挙げられる。学術会議では2000年6月に、今後10年間で女性会員比率を10%まで高める（当時は1.0%）という目標を設定したが、第20期（2005年10月～）の女性会員は目標を大きく超え、20%（42人）に達した。この中には日本生態学会の鷲谷いづみ会長も含まれている。

数値目標を掲げることには、女性の間にも賛否両論があるようである。しかし、何らかの障壁によって低く抑さえられている現在の女性比率が、数値目標を立てることで改善され、各界で働く女性研究者・技術者の数が増えたとき、これまでと変わらぬ科学・技術界であったなら、女性を排除する理由は何もないし、より良くなっている可能性も十分期待できる。生態学会でも積極的に女性が活躍する機会や場を増やす努力を今後も継続することが必要であろう。

## シンポジウムに参加して

大曾根陽子（森林総合研究所・重点領域研究支援協力員）

シンポジウムの主旨は一言で言えば、女性の科学者、技術者の割合が少ないのはなぜか、どうしたら増加させることができるのか、というものだった。それが今回のテーマであることを知って、最初は少し驚いた。高校の時に理系、文系に分けられて以来まわりに女性が少ないのはあまりに当然のことで、それがあえて問題として取り上げられることだとは思ってもいなかったからだ。しかし、各講演、討論会の内容は、なかなか先の就職も見込みの立たない私自身の現状とも重なるところがあり、大変興味深きいた。

特に印象に残ったのは、理、工学系のどの学会でも学生会員の女性比率に比べて、一般会員の女性比率がぐっと減少するという指摘である。つまり、もともと理、工学系に進学する女性が少ないだけでなく、卒業後研究を続ける女性はさらに少ないということだ。卒業後に研究から離れてしまう女性が少なくない最大の原因は、結婚、出産などで職場の地理的条件や就労条件が折り合わなくなることだという。私自身、この先自分の望む地域で望む職を手に入れることはかなり難しいだろうと思うので、多分これはその通りなのだろう。他の生物系の学会は学生会員と一般会員の女性比率の格差が少ない傾向にある中、日本生態学会では、この格差が大きいのは気になることである。

また、ある大学の先生はこんなことをおっしゃっていた。「どんな研究者でも時間と労力をかければ業績は出る。だから、みんな頑張って研究をしてしまう。その中で、子育てなどに時間をとられてしまう女性は当然不利になる。抜け駆けして努力した人ほど有利になる仕組みだから、この仕組みを止めることは難しい。トップダウンの政策が必要である」と。どのようなトップダウンの政策が有効なのかは不明だが、学位を取って一年半、もう少し業績が増えなければとても枕を高くして眠れないという気分の私にはおっしゃるところはわかる。

要するに、女性研究者、技術者が少ない背景には、就職の選択の余地がなく、少ないポストをめぐる激しい競争があると女性研究者がはじき出されやすくなるという構造があるらしい。では、どうしたら女性研究者、技術者増やせるかという議論になるとなかなかこれはという具体案は出ない。かろうじて、男性が育児、家事に参加すること、数値目標をもうけて職場の女性の割合を増やす、など。私自身はもし上のような理由で女性が少ないならば、単純に就職枠の総数が増えれば、女性研究者、技術者の割合もあがるのではないかと思う。

## 記 事

### I. 次々期会長及び次期全国委員選挙の結果について

2005年10月15日に投票を締め切り、10月25日、日本生態学会事務局において開票を行った結果、次々期会長および第13期全国委員は下記のように決定いたしました。

なお任期は、会長が2008年1月1日から2009年12月31日、全国委員が2006年1月1日から2007年12月31日までのそれぞれ2年間です。

日本生態学会選挙管理委員会  
委員長 梅原 徹

### 1. 次々期会長 投票数 425 票（内有効投票数 419 票）

選出	矢原 徹一	132 票
次点	中静 透	100 票
	甲山 隆司	56 票
	中根 周歩	49 票
	広瀬 忠樹	25 票
	その他 41 名（合計）	57 票

### 2. 全国委員

全国選出

順位	氏名	所属地区	票数
辞退	酒井 章子	(近畿)	154
1	柴田 銃江	(関東)	128

2	杉本 敦子	(北海)	105
3	山本 智子	(九州)	72
対象外	佐竹 暁子	(外国)	70
4	矢原 徹一	(九州)	56
5	粕谷 英一	(九州)	45
6	酒井 聡樹	(東北)	44
7	東 正剛	(北海)	37
8	嶋田 正和	(関東)	36
9	松田 裕之	(関東)	34
10	巖佐 庸	(九州)	33
11	竹中 明夫	(関東)	32
12	中根 周歩	(中四)	30
13	中静 透	(近畿)	28
14	日浦 勉	(北海)	27
15	工藤 岳	(北海)	27
地方区	占部 城太郎	(東北)	25
次点	鷺谷 いづみ	(関東)	23

\* 佐竹氏は海外在住のため会則7条5(会員の「権利」  
『本会の会長・全国委員を選任し、またはこれらに選任  
されること。ただし、この権利は正会員(国外在住の会  
員を除く)に限る』)により対象外となります。

#### 地区選出(氏名・票数)

北海道	工藤 岳 10、日浦 勉 8 野田 隆史 7、綿貫 豊 6(次点)、 その他4名6
東北	占部 城太郎 3、竹原 明秀 3(次点)、 その他2名3
関東	柴田 銃江 24、竹中 明夫 20、嶋田 正和 13、松田 裕之 12、小池 文人 9、 樋口 広芳 7(次点)
中部	山本 進一 10、紙谷 智彦 7(次点)
近畿	酒井 章子 10、曾田 貞滋 8、加藤 真 8(次点)、その他1名8
中四国	波田 善夫 19、中坪 孝之 18(次点)
九州	山本 智子 9、粕谷 英一 6、巖佐 庸 6、伊澤 雅子 5、矢原 徹一 5、富山 清升 3(次点)、その他1名3

選挙細則第7条1により、同票の場合は年少者が選出  
されました。また、第7条2により、地区選出委員は下  
線の方々になりました。

### 3. 地区別会員数・投票者数及び投票率

	会員数	投票者数	投票率(%)
北海道	402	56	13.9
東北	222	16	7.2
関東	1282	146	11.4
中部	512	48	9.3
近畿	651	81	12.4
中四国	300	44	14.7
九州	324	34	10.5
全国	3693	425	11.5

### II. 全国委員会での承認事項

- Ecological Research 編集委員の交代が承認された。委員と任期については日本生態学会役員一覧参照。
- 選挙管理委員として以下の委員が承認された。  
梅原徹(環境建設(株)調査研究室)  
草加伸吾(滋賀県立琵琶湖博物館)  
寺島一郎(大阪大学)  
徳地直子(京都大学)  
前迫ゆり(奈良佐保短期大学)
- 第4回日本生態学会賞および第10回日本生態学会宮地賞受賞者が承認され決定した。  
第4回日本生態学会賞受賞者  
松本 忠夫(放送大学・教授)  
第10回日本生態学会宮地賞受賞者  
相場慎一郎(鹿児島大学理学部地球環境科学科)  
加藤 元海(愛媛大学沿岸環境科学研究センター)
- 日本生態学会誌の今年度超過ページについて承認された。
- 日本生態学会ロゴマークを会員から募り制定することが承認された。詳細は表紙見開きページ参照。
- 以下の役員が承認された。  
常任委員  
齋藤隆(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)  
中静透(総合地球環境学研究所)  
長谷川真理子(早稲田大学政治経済学部)  
山本智子(鹿児島大学水産学部付属海洋資源環境教育研究センター)  
石川真一(群馬大学社会情報学部)  
庶務幹事  
津田智(岐阜大学流域圏科学研究センター)  
会計幹事

肥後陸輝（岐阜大学地域科学部）

7. 生態誌および保全誌投稿規定の変更が承認された。投稿規定については生態誌 56 巻 1 号および保全誌 11 巻 1 号掲載予定。
8. 次期全国委員選挙にて当選の酒井章子氏より辞退届けがあり、承認された。

### Ⅲ. 書評依頼図書（2005 年 4 月 1 日 - 2005 年 10 月 11 日）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又は E メールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 菊沢喜八郎著「生態学シリーズ 葉の寿命の生態学—個葉から生態系へ—」（2005）228 pp. 共立出版（株） ISBN：4-320-056
2. 日高敏隆編「地球研叢書 生物多様性はなぜ大切か？」（2005）192 pp. （株）昭和堂 ISBN：4-8122-0506-9
3. 板垣悟著「クマの畑をつくりました」（2005）184 pp. 地人書館 ISBN：4-8052-0759-0
4. 日本学術会議「学術会議叢書 9 医療事故は予防できるか」（2005）208 pp. 財団法人 日本学術協力財団 ISBN：4-939-91-18-10
5. 福井勝義編「社会化される生態資源—エチオピア絶え間なき再生—」（2005）380 pp. 京都大学学術出版会 ISBN：4-87698-652-2
6. 福嶋司編「植生管理学」（2005）242 pp. 朝倉書店 ISBN：4-254-42029-3
7. エコソフィア編集委員会編「エコソフィア 15 号海の研究はおもしろい！」（2005）128 pp. 昭和堂 ISBN：4-8122-0515-8
8. 山極寿一著「ゴリラ」（2005）258 pp. 東京大学出版会 ISBN：4-13-063324-4
9. 渡辺弘之著「東南アジア樹木紀行」（2005）250 pp. 昭和堂 ISBN：4-8122-0424-0
10. 阪本寧男著「雑穀博士ユーラシアに行く」（2005）288 pp. 昭和堂 ISBN：4-8122-0423-2
11. 鷺谷いづみ・竹内和彦・西田睦著「生態系へのまなざし」（2005）314 pp. 東京大学出版会 ISBN4-13-063325-2
12. 日本学術協力財団「学術会議叢書 10 今、なぜ若

者の理科離れか」（2005）276 pp. ISBN：4-939091-19-8

13. エコソフィア編集委員会編「エコソフィア 16 号きのこが結ぶネットワーク」（2005）106 pp. 昭和堂 ISBN：4-8122-0535-2
14. 浅野貞夫著「浅野貞夫日本植物生態図鑑」（2005）636 pp. 全国農村教育協会 ISBN：4-88137-117-7
15. 野中健一著「民族昆虫学」（2005）206 pp. 東京大学出版会 ISBN：4-13-060185-7

### Ⅳ. 寄贈図書

1. 「研究環境国際化の処方開発調査研究報告書」（2005）248 pp. 社団法人 科学技術国際交流センター
2. 「東レ科学振興会第 45 回事業報告書」（2005）132 pp. 東レ科学振興会
3. 「ニュースレター No.9 - 11」（2005）16 pp. 東京大学海洋研究所
4. 「SESSILE ORGANISMS」（2005）66 pp. 日本付着生物学学会
5. 「うみうし通信 No.46」（2005）12 pp. （財）水産無脊椎動物研究所
6. 「2004 年度年報」（2005）282 pp. 鹿島学術振興財団
7. 「自然史学会連合第 10 回シンポジウム 日本の自然史—多様な生きものたちのエピソード」（2005）28 pp. 自然史学会連合
8. 「改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）」（2005）562 pp. 沖縄県文化環境部自然保護課
9. 「財団法人下中記念財団 2005 年報」（2005）64 pp. 財団法人下中記念財団
10. 「農林水産生態系における有害化学物質の総合管理技術の開発」（2005）24 pp. 農林水産技術会議事務局
11. 「新・実学ジャーナル 12 月号」（2005）10 pp. 東京農業大学
12. 「景観園芸研究」（2005）80 pp. 兵庫県立淡路景観園芸学校

### Ⅴ. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 第 21 回京都賞記念ワークショップ  
日時：2005 年 11 月 12 日（土）  
場所：国立京都国際会館  
主催：（財）稲盛財団

2. 市民セミナー シカと山と人の新しい関係：狩猟管理から生態系管理へ  
 期間：2005年10月1日  
 場所：神奈川県立生命の星・地球博物館大ホール  
 主催：横浜国立大学21世紀COEプログラム「生物・生態環境リスクマネジメント」
3. 景相生態学からの発想 ～生きものたちからーランドスケープ50年～  
 日時：10月22日（土）  
 場所：新宿御苑インフォメーションセンター  
 主催：市民ランドスケープ研究会
4. 2005年花の万博記念「コスモス国際賞」受賞記念講演会・シンポジウム  
 日時：10月17日（月） 大阪オーバルホール  
 10月21日（金） 東京農業大学世田谷キャンパス百周年記念講堂  
 主催：財団法人国際花と緑の博覧会記念協会
5. 自然と人間の共生シンポジウム  
 日時：9月11日（日）  
 場所：富山国際会議場  
 主催：富山県
6. 国際ワークショップ "Environmental Risk Assessment based on Soil Ecotoxicological Methods"  
 日時：10月15日  
 場所：横浜国立大学みなとみらいキャンパス  
 主催：国立大学法人横浜国立大学大学院環境情報研究院21世紀COEプログラム

## VI. 地区会活動報告（2004年度）

### 北海道地区会（2004年9月1日 - 2005年8月31日）

- (1) 2004年度役員会を開催した。

開催日：2005年2月19日（土）

場 所：札幌市 北海道大学低温科学研究所

出席者：神田房行・石川幸男・永光輝義・紺野康夫・露崎史朗・高田壮則・原登志彦

#### 議 題

1. 本年度活動報告
2. 会計報告
3. 来年度活動予定（地区大会）
4. 選挙
5. その他

以上の件について審議の上、了承された。

- (2) 2004年度地区大会・総会を開催した。

開催日：2005年2月19日（土）

会 場：札幌市 北海道大学低温科学研究所

#### 若手研究発表会

「大気中CO<sup>2</sup>濃度の上昇に伴うケヤマハンノキの光合成能力の変化～窒素固定菌を持たない近縁のカバノキ属と比較して～」江口則和<sup>1</sup>・唐津一樹<sup>2</sup>・上田龍一郎<sup>3</sup>・船田良<sup>4</sup>・高木健太郎<sup>5</sup>・日浦勉<sup>5</sup>・笹賀一郎<sup>5</sup>・小池孝良<sup>5</sup>（<sup>1</sup>北大院・農、<sup>2</sup>北海道東海大・工、<sup>3</sup>北海道ダルトン、<sup>4</sup>農工大・農、<sup>5</sup>北大・生物圏セ）

「低温と強光ストレスに対する当年生ミズナラ実生の生理生態的応答」津田元（北大院・地球環境）・小野清美・原登志彦（北大・低温研）

「果実の光合成がフクジュソウの繁殖コストに及ぼす影響」堀端聡（北大院・地球環境）

「葉の質がミズナラに生息する蛾類幼虫群集に及ぼす影響」麻沼美宝（北大院・地球環境）

「花序形態と花序内蜜分布がマルハナバチの訪花行動に与える影響」平林結実（北大院・地球環境）

「潜葉性昆虫 - 寄生蜂群集における寄生率の空間動態」平尾聡秀（北大・苫小牧研究林）

「異なる倍数性、繁殖様式を持つミミコウモリ（キク科）の遺伝変異」立花麻梨（北大院・地球環境）

「岩礁潮間帯固着動物群集の種多様性の緯度勾配：空間スケール変異性とその形成機構」奥田武弘・野田隆史（北大院・水産）・仲岡雅裕（千葉大院・自然科学）・山本智子（鹿児島大・水産）・堀正和（東大院・農）

「アイナメ属3種の産卵基質の違いは交配前隔離機構として機能するか」木村幹子（北大院・水産）・宗原弘幸（北大FSC）

「倒木上における更新初期段階のエゾマツとトドマツの個体群動態と周囲環境の関係」飯島勇人・渋谷正人・斎藤秀之・高橋邦秀（北大院・農）

「カムチャッカ半島におけるシラカンバとカラマツの実生及び萌芽の生存戦略」飯村佳代（北大院・地球環境）・本間航介（新潟大）・奥田将己（統数研）・隅田明洋・原登志彦（北大・低温研）

「ベニバナイチヤクソウの生存戦略における菌根菌の役割」國司綾子<sup>1</sup>・長谷川成明<sup>2</sup>・橋本靖<sup>1</sup>（<sup>1</sup>帯畜大院・生態保護・<sup>2</sup>北大院・地球環境）

#### 一般講演

「日高南端部の植物学的自然概説」佐藤 謙（北海学園大・工・生物）

「保全生態学的見地からみた日高南部個体群のエゾナキウサギの音声変異」小島 望（北教大岩見沢・教）

「釧路湿原北斗に見られる湧水辺植生」佐藤雅俊（帯広畜産大学畜産科学科）

「ナニワズの花の形態と結実」半田孝俊（半田植生研究所）

### 懇親会（兼若手賞授賞式）

若手賞に、平林結実（北大院・地球環境）、國司綾子（帯畜大院・生態保護）の2名を選び、賞状と寸志を送った。

### 総会

#### 議題

1. 本年度活動報告
2. 会計報告
3. 来年度活動予定
4. 選挙について
5. その他

「若手賞」を「奨励賞」に改称する件について。日高道路建設に関する反対の議案書について。

審議の後、一部修正の上、了承された。

### 東北地区会

#### (1) 東北地区会第49回大会

日 時：2005年1月22日 - 23日

会 場：弘前大学農学生命科学部（コラボレーションセンター 8F 会議室）

#### シンポジウム（1月22日）

「白神山地の伝統と保全」

1. 趣旨説明 国指定白神山地鳥獣保護区  
牧田 肇（弘前大学農学生命科学部）
2. 白神山地とマタギの暮らし  
工藤光治（白神マタギ舎）
3. 動物保護と地域社会  
羽角俊裕（野生動物保護管理事務所）

#### 4. 総合討論

#### 一般講演（1月23日）

1. 「ハスノハカシパンの個体群動態：幼生の着底および生残と関連させて」武田 哲（東北大院・理・臨海）
2. 「ヨシ原における埋土種子集団におよぼす火入れ・

刈取りの影響」竹原明秀（岩手大・人文社会）

3. 「白神山地櫛石山国有林スギ人工林における広葉樹林再生作業（環状剥皮の適用と枯死進捗具合の測定）」\* 鈴木邦彦・大森弘一郎・村田孝嗣（日本山岳会）
4. 「アオモリトドマツの球果生産が当年から3年後において枝の伸長に及ぼす影響について」関 剛（森林総研東北）
5. 「地下部を含めた樹木個体呼吸」森 茂太（森林総研東北）
6. 「炭素・窒素・硫黄安定同位体比を用いた内陸性塩水湖チャーニー湖沼群の物質循環解析」\* 菊地永祐（東北大・東北アジア研）・土居秀幸（東北大院・生命科学）・溝田智俊（岩手大・農）・鹿野秀一（東北大・東北アジア研）・狩野圭市（東北大院・生命科学）・N. Yurlova, E. Yadorenkina, E. Zuykova（SB RAS）
7. 「蔵王芝草平の池塘群におけるユスリカ個体群の密度決定要因」\* 富樫博幸・鈴木孝男・占部城太郎（東北大院・生命科学）
8. 「シギ・チドリ類の分布を規定する要因としての大型底生動物生息密度と人の干潟への立ち入り」\* 狩野圭市・鈴木孝男（東北大院・生命科学）・菊地永祐（東北大・東北アジア研）
9. 「福島市笹森山におけるクマガイソウのマルハナバチによる訪花頻度、送粉頻度、および結実率」伊東英恵（福島大・教育）・\* 黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

#### (2) 2004年度地区委員会

日 時：2005年1月22日 13:00 - 14:00

会 場：弘前大学農学生命科学部

出席者：東 信行、佐原雄二、牧田 肇、蒔田明史、竹原明秀、牧陽之助、占部城太郎、菊地永祐、辻村東國、黒沢高秀、鈴木孝男（庶務幹事）、牧野 渡（会計幹事）

### 報告事項

#### 1. 庶務報告

- 1) 2004年7月20日：地区会会報第63・64合併号を発行した。
- 2) 2004年8月31日に締切られた地区委員選挙の結果、以下の23名が選出された。

（任期 2004年9月1日 - 2006年7月31日）



青森県：東 信行、佐原雄二、牧田 肇、次点：武田 哲

秋田県：寺井謙次、蒔田明史、次点：星崎和彦

岩手県：竹原明秀、牧陽之助、松政正俊、由井正敏、次点：杉田久志

宮城県：占部城太郎、河田雅圭、菊地永祐、酒井聡樹、鈴木孝男、清和研二、平吹喜彦、広瀬忠樹、次点：牧 雅之

山形県：玉手英利、辻村東國、安田弘法、次点：斎藤員郎

福島県：木村勝彦、黒沢高秀、星 一彰、次点：木村吉幸

(注) 福島県では当選された樫村利道氏が辞退を申し出られたため、星一彰氏が繰上げ当選。

地区委員の互選の結果、地区委員長には占部城太郎氏が選出された。また、地区委員長の委嘱により、庶務幹事を鈴木孝男氏、会計幹事を牧野渡氏が引受けることになった。

3) 2004年9月29日：日本生態学会自然保護専門委員会より、「秋田県男鹿半島芦の倉沢治山事業計画に関する要望書(案)」に対して東北地区会の意見が求められたことに伴い、緊急性もあったことから、メールで地区委員に連絡した上、旧地区委員長が全体の意見をまとめて、自然保護専門委員会に回答した。

4) 2004年10月21日：「秋田県男鹿半島芦ノ倉沢治山事業計画」に対するアフターケア委員会委員として、東北地区から、竹原明秀(岩手大学)、蒔田明史(秋田県立大学)、菊地永祐(東北大学)の3名を推薦した。

5) 2004年11月2日：「秋田県男鹿半島芦ノ倉沢治山事業計画」アフターケア委員会(委員長：菊地永祐氏)は、東北森林管理局、林野庁、秋田県に対し、自然保護専門委員会委員長を通じて意見書を提出した。意見書提出にあたっては東北地区会の了解が必要であったが、意見書の効果と緊急性を考え、東北地区会に対しては事後了承をお願いすることにした。

## 2. 会計報告

2003年度決算報告と2004年度中間報告ならびに今後の執行見込について報告があり、了承された。

3. 「秋田県男鹿半島芦の倉沢治山事業計画に関する要望書」について

上記要望書の提出に関わる経緯とその後の状況について、アフターケア委員会委員長の菊地永祐氏から説明があった。

## 審議事項

### 4. 2005年度予算

2005年度の予算案について説明があり、承認された。

### 5. 次回地区大会開催地

次回地区大会を秋田県が引受ける旨の発言があり、これを承認した。

### 6. 次次回地区大会開催地

次次回の地区大会開催地について、これまでの地区大会開催県の順番表をもとに審議した結果、山形県にお願いすることになった。

### 7. 会計監査について

これまで、会計監査が特になされてなかったことをうけて、きちんと行うべきであるという発言があり、種々議論を行った結果、会計監事をおくことにした。会計監事は原則として事務局所在地の地区委員にお願いすることとした。

### 8. 選挙管理委員会について

これまで、選挙管理委員会については明文化されていなかったことなど、地区委員の選挙実施に関してははっきりしていない部分の指摘があり、種々議論を行った結果、地区委員の任期、同一得票数の場合の取扱い等を含め、明文化することになった。

### 9. 自然保護専門委員会委員について

自然保護専門委員会の東北地区委員として現在竹原明秀氏と佐原雄二氏が選出されているが、推薦・選出方法があいまいなまま継続されている実情があることから、改選の時は地区委員会に図ることとした。また、東北地区の自然保護に関わる問題については、早めに自然保護専門委員に連絡してほしい旨の発言があった。

### (3) 2004年度地区会総会

日 時：2005年1月23日 11：45 - 12：30

会 場：弘前大学農学生命科学部(コラボレーションセンター 8F 会議室)

## 報告事項

1. 地区委員会における庶務報告、会計報告が了承された。

## 審議事項

2. 2005年度予算案が原案の通り、承認された。
3. 次回地区大会は秋田県で開催することが承認された。
4. 次次回地区大会を山形県にお願いすることが承認された。

## 関東地区会

### 2004年活動報告

#### (1) 年度区切りの移行

2004年より会計と事業を年度による方式から、同一年の1月 - 12月の区切りに移行した。移行中のため2004年の活動報告は2004年4月 - 2004年12月のものであり、例年行っている修士論文発表会は対象期間外となる。

#### (2) 第1回地区委員会

2004年7月28日に横浜国立大学で開催した。議題については事前に地区委員間のメーリングリストにて議論している。

参加者：鈴木邦雄（地区会長）、村上雄秀（編集幹事）、椿宜高、松田裕之、小池文人（庶務・会計幹事）

#### (3) 地区例会

2004年12月12日（日） 横浜国立大学・教育文化ホール

公開シンポジウム「日本の人口問題—保全生態学からの提言—」

主催：日本生態学会関東地区会 共催：国際生態学センター

「戦後日本の高度成長は若者に何をもたらしたか」  
長谷川真理子（早稲田大学）

「都市環境の人工化と生活者の健康との関係について —横浜市、川崎市を対象とした調査と分析—」  
田中貴宏（神戸大学）

「日本の出生力低下の諸要因：人類生態学からの検討」  
中澤 港（群馬大学）

#### (4) 支部総会

2004年12月12日（日） 横浜国立大学・教育文化ホール

<報告事項>

- ・ 関東地区会の会員動向
- ・ 地区委員会報告
- ・ 会計報告

<審議事項>

- ・ 2003年度決算
  - ・ 2005年予算案
  - ・ 2005年活動予定
- (5) 日本生態学会関東地区会会報第53号を発行した。

## 中部地区会

### (1) 2004年度地区会総会・講演会

日 時：2004年12月4日

会 場：岐阜大学流域圏科学研究センター（連合農学棟合同ゼミナール室）

#### 報告事項

- ・ 2004年度地区会活動報告
- ・ 2004年度地区会会計報告（中間）
- ・ 次期日本生態学会事務局について
- ・ 次期（2005 - 2007年度）中部地区会事務局について
- ・ 第53回日本生態学会大会（2006年春）の開催
- ・ その他

#### 審議事項

- ・ 次期（2005 - 2007年度）中部地区会長の選出（承認、信州大学佐藤利幸氏）

#### その他

- ・ 第53回日本生態学会大会開催地への協力

#### 講演会

1. 島野光司（信州大・理）「ブナ林を通してみる植生分化のメカニズム」
2. 谷友和（富山大・極東地域研究センター）・工藤岳（北海道大・地球環境科学）「林床性高茎草本植物の季節的光変動環境下における成長と同化様式」
3. 津田智（岐阜大・流域圏科学研究センター）「草原の火入れと植生」

### (2) 2005年度中部地区大会・総会

日 時：2005年10月15日

会 場：筑波大学下田臨海実験センター

担 当：筑波大学・青木優和氏

研究発表会

1. 島野光司（信州大・理）・井田秀行（信州大・教育）「冬期の丘陵地におけるノウサギの植生環境利用」
2. 赤松史一（信州大・院）・戸田任重（信州大・理）・沖野外輝夫（早稲田大・人間科学）「河畔

林に生息するジョロウグモ (*Nephila clavata*) への河川性餌資源の寄与」

3. 熊谷直喜・品川秀夫・佐藤壽彦・土屋泰孝・青木優和 (筑波大・下田臨海)「直達発生型海産無脊椎動物の移動とその生態学的意義」
4. 久保田瞳美・島野光司 (信州大・理)「スキー場の管理がもたらす植生への影響」
5. 椋本祐司・佐藤利幸 (信州大・理)「長野県における絶滅危惧植物の種密度分布とその要因考察」
6. 青木優和 (筑波大・下田臨海)「海藻穿孔性端脚類コンブノネクイムシの資源利用」

#### 総会報告事項

- ・会長の交代とそれともなう事務局の変更
- ・中部地区大会の開催
- ・2004年度会計監査の報告
- ・2005年度の会計中間報告
- ・第53回日本生態学会大会について
- ・各種委員会からの報告
- ・次年度中部地区大会について

#### 近畿地区会

- (1) 2004年11月6日：第1回地区委員会、第1回例会の開催 (場所：大阪市立大学理学研究科)  
地区委員会議題：1)2004年度第1回例会について。2) 2004年度総会および第2回例会について。3) その他。  
第1回例会プログラム：
  1. 柴田淳也 (大阪市立大学)：ニジギンポにおける求愛する性の季節的な切り替わりとそれをもたらす要因
  2. 伊東明 (大阪市立大学)：樹木群集のハビタット解析法と熱帯林の種多様性におけるハビタットの重要性
- (2) 2005年1月22日：第2回地区委員会、2004年度年次総会、第2回例会の開催 (場所：京都大学理学部)  
地区委員会議題：1)2004年度総会の議題について。2) 2005年度第1回例会について。3) 2005年度フィールドシンポジウムについて。4) その他。  
年次総会議題：1) 2004年度活動報告。2) 2004年度会計報告。3) 2005年度活動計画。4) 2005年度予算案。5) その他。

#### 例会プログラム：

1. 成田亮 (京都大学大学院・農学研究科)：安定同位体比による京都近辺のツキノワグマの食性解析
2. 戸田哲也・武田博清・徳地直子・太田誠一 (京都大学大学院・農学研究科)・チョンラックワチャリンラット・サンカイトプラニート (カセサート大学・林学部)：タイ国乾燥落葉林におけるバイオマスと窒素循環—防火措置による草本から樹木への植生遷移の影響—
3. 名波哲 (大阪市立大学大学院・理学研究科)：ウリハダカエデの性転換：枯死する前に雌になる
4. 吉川徹朗 (京都大学大学院・農学研究科)：種子食鳥類イカルによる、鳥散布果実に対する散布前種子捕食
5. 高橋明子 (京都大学大学院・農学研究科)：ミズキの果実サイズの鳥散布における意義
6. 平山大輔 (大阪市立大学大学院・理学研究科)・藤井俊夫 (兵庫県立人と自然の博物館)・名波哲・伊東明・山倉拓夫 (大阪市立大学大学院・理学研究科)：アカガシ亜属樹木の雌性繁殖特性量の個体間、種間、および年間変動

#### 中国四国地区会

- (1) 第49回中国四国地区大会 (2005年5月21、22日、於：岡山大学)
  - 1) 一般講演  
「産雌単為生殖下における性選択：産雌単為生殖のザトウムシにおける雄触肢の発達」鶴崎展巨 (鳥取大・地域・生物)  
「タガメの餌メニューと成長に伴う食性の変化」大庭伸也 (岡山大・農)・日鷹一雅 (愛媛大)、中筋房夫 (岡山大・農)  
「山口県の溜め池に生息する外来魚ブルーギルとプランクトン群集の関係」谷口義則・森谷麻以・竹重陽子・久保田昌子・森井智裕・服部礼子 (山口県立大・生活・生活環境)  
「国の天然記念物アユモドキの産卵生態の解明と産卵場の創出」湯浅卓雄  
「Study on Pattern and Process of Bamboo Forest Expansion」Fabiola B. SAROINSONG<sup>1)</sup>・Keiji SAKAMOTO (岡山大・院・自然)・Naoko MIKI (岡山大・農)・Ken YOSHIKAWA (岡山大・院・

自然)

「温暖化環境下でのアラカシ群落の生理生態と成長量：実験開始2年間の評価」今川克也・中根周歩・周承進・林明妃（広島大・院・生物圏科学）

「岡山県における外来食虫植物の侵入・増殖状況」片岡博行（岡山大・資生研）・西本孝（岡山県自然保護センター）・波田善夫（岡山理科大・総合情報）

「草原生絶滅危惧植物ヤナギタンポポ・カセンソウの生態学的特性」宮本裕美子・石川慎吾・三宅尚（高知大・理・自然環境科）

「テリハノイバラの生態学的特性と河川砂礫堆における成長様式」福岡やよい・石川慎吾・三宅尚（高知大・理・自然環境科）

## 2) ポスター発表

「吉野川における2004年大出水は砂州上のシナダレスズメガヤの除去に有効だったか」福岡泰斗（徳島大・院・建設）・鎌田磨人（徳島大・工・建設）

「河川植生と立地環境—岡山県高梁川の事例—」寺下史恵・奥本康之・田村徹・森定伸（株式会社ウエスコ）

「岡山県旭川の河川植生—約20年前との比較—」藤谷佳代・亀井康弘・波田善夫（岡山理科大・総情・生地）

「モウソウチク林冠部における光強度、シュート構造および個葉光合成特性」澤木祐作・小林剛（香川大・農）

「間伐がヒノキ人工林における窒素利用と落葉の季節性に及ぼす影響」稲垣善之・倉本恵生（森林総研四国）・深田英久（高知県森技センター）

「先駆性樹種アカメガシワとカラスザンショウの種子散布者としての果実食鳥類」佐藤重穂・酒井敦・倉本恵生（森林総研四国支所）

「香川県のクスノキ林の林分構造」井上健（香川大学・院教育・理科教育）

「徳島市城山の特定植物（ホルトノキ）群落の存続可能性」久戸瀬隆之・赤松伸祐・布川洋之（徳島大・工・建設工学）・森本康滋（徳島県自然保護協会）・鎌田磨人（徳島大・工・建設工学）

「四国山地ブナ林の樹木群集構造と多様性：標高とパッチサイズによる分化」倉本恵生・小谷英司・酒井敦・稲垣善之（森林総研四国）・増渕勝也（高知大・理）・松英恵吾（宇都宮大・農）

「岡山県南部における自然植生—特に植生の分布とその気候的要因—」位田真弓（岡山理科大・総情院・生地）・波田善夫（岡山理大・総情・生地）

「瀬戸内海南部浅海域における2種のアミ類、*Nipponomysis ornata* (Ii) と *Iiella ohshimai* (Ii) の食性について」岡慎一郎（瀬戸内水研）・花村幸生（国際農林水産業研究センター）

「物部川下流域の砂礫堆における植生変遷と礫河原植生の回復実験」橋本恵・石川慎吾・三宅尚（高知大・理・自然環境科学）

## 3) 総会

### a. 報告事項

各種委員会報告

地区会員の状況 会員数284名（昨年度比-10名）

会計報告：平成16年度会計

### b. 審議事項

次期地区大会開催地：愛媛

平成16年度決算

平成17年度予算

その他

## 九州地区会

### (1) 地区委員会

日時：2004年5月15日

場所：福岡（九州大学理学部講義棟）

### (2) 地区大会

第49回三学会九州支部・地区合同大会

会期：平成16年5月15日（土）-16日（日）

会場：九州大学理学部

#### 一般講演（\*は発表者）

「地表性哺乳類調査における自動撮影の有効性の評価」\*安田美沙、矢原徹一（九大・理・生物）

「インドネシア共和国ジャワ島西部におけるマレーヒヨケザルの分布」\*馬場稔<sup>1</sup>、金城和三<sup>2</sup>、Boadi<sup>3</sup>、伊澤雅子<sup>2</sup>、中本敦<sup>2</sup>、土肥昭夫<sup>4</sup>（<sup>1</sup>北九州市立自然史・歴史博物館、<sup>2</sup>琉大・理、<sup>3</sup>ボゴール動物博物館、<sup>4</sup>九大院・理）

「ツシマヤマメコ 定住オスの年齢に伴う個体間関係の変化」\*上野あや<sup>1</sup>、檜山智嗣<sup>1</sup>、伊澤雅子<sup>1</sup>、土肥昭夫<sup>2</sup>（<sup>1</sup>琉球大・理・海洋自然、<sup>2</sup>長崎大・環境科学）

「佐賀県下のテンの糞内容物による食性比較とその

類型化の試案」\* 足立高行<sup>1</sup>、荒井秋晴<sup>2</sup>、桑原佳子<sup>1</sup>、吉田希代子<sup>2</sup> ( <sup>1</sup>大分野生生物研究センター、<sup>2</sup>九歯大・中央研)

「九州に生息する齧歯目ネズミ科における毛の微細構造」\* 荒井秋晴<sup>1</sup>、吉田希代子<sup>1</sup>、足立高行<sup>2</sup>、桑原佳子<sup>2</sup>、馬場 稔<sup>3</sup> ( <sup>1</sup>九歯大・中央研、<sup>2</sup>大分野生生物研究センター、<sup>3</sup>北九州市立自然史博物館)

「シジュウカラにおける婚外交尾パターン」\* 河野かつら<sup>1</sup>、山口典之<sup>2</sup>、矢原徹一<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>九大・理・生態科学、<sup>2</sup>立教大・理・動物生態)

「ソウシチョウとウグイスに対する捕食者ギルド」\* 江口和洋<sup>1</sup>、天野一葉<sup>2</sup> ( <sup>1</sup>九大院・理・生物、<sup>2</sup>WWF ジャパン)

「遺跡試料による鳥類相復元の現状と課題」\* 江田真毅<sup>1</sup>、小池裕子<sup>2</sup> ( <sup>1</sup>学振 PD、<sup>2</sup>九州大・比文)

「ツキノワグマにおけるミトコンドリア DNA コントロール領域 left domain の多型解析」\* 安河内彦輝<sup>1</sup>、西田 伸<sup>1</sup>、橋本幸彦<sup>2</sup>、黒崎敏文<sup>2</sup>、米田政明<sup>2</sup>、小池裕子<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>九州大・院比文、<sup>2</sup>自然研)

「ヘアートラップ試料をもちいた東北地方ツキノワグマの DNA 解析」\* 西田伸<sup>1</sup>、橋本幸彦<sup>2</sup>、黒崎敏文<sup>2</sup>、米田政明<sup>2</sup>、小池裕子<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>九州大・院比文、<sup>2</sup>自然研)

「鯨類における MHC 多型解析—特にオウギハクジラ (*Mesoplodon Stejnegeri*) について—」\* 曾根恵海<sup>1</sup>、角田恒夫<sup>2</sup>、西田 伸<sup>1</sup>、山田 格<sup>2</sup>、小池裕子<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>九州大・院比文、<sup>2</sup>科博・動物)

「牛深市に漂着したジュゴン (*Dugong dugon*) の炭素・窒素安定同位体測定」\* 谷田部明子<sup>1</sup>、池田和子<sup>2</sup>、三原正三<sup>1</sup>、小池裕子<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>九大・比文、<sup>2</sup>自然保全)

「アイソトープ分析によるツシマヤマネコ (*Felis bengalensis euphilura*) の食性」\* 三谷奈保<sup>1,2</sup>、三原正三<sup>1</sup>、小池裕子<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>九大・院比文、<sup>2</sup>(財)自然環境研究センター)

「施肥条件下でのススキの生産力と窒素吸収量に関する研究」\* 村山和也、西脇亜也 (宮崎大・院・農)

「表土利用と刈り取りによるセイタカアワダチソウの抑制効果」\* 西脇亜也、岡田久美子 (宮崎大・農)

「宮崎地域のハマダイコンの遺伝的構造」\* 黒木嘉文、西脇亜也 (宮崎大・農)

「キキョウソウの開花特性と開放花/閉鎖花による種子生産の様式」\* 境 美由紀<sup>1</sup>、杉浦直人<sup>2</sup> ( <sup>1</sup>熊本

大・院・自然科学、<sup>2</sup>熊本大・理)

「北九州市における絶滅危惧種ガシヤモクの生育状況と生育環境」\* 真鍋 徹<sup>1</sup>、須田隆一<sup>2</sup>、大野睦子<sup>3</sup>、笹尾敦子<sup>2</sup> ( <sup>1</sup>北九州市立自・歴博、<sup>2</sup>福岡県保環研、<sup>3</sup>水草研究会)

「中国新疆ウイグル自治区トルファン地域における植物インベントリー調査」\* 米格来阿衣克尤木<sup>1</sup>、松島 昇<sup>1,2</sup>、小池裕子<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>九州大・院比文、<sup>2</sup>(財)自然研)

## シンポジウム

「生物学における高校・大学連携を考えるシンポジウム」

### 講演：

◎高大連携による生物学教育改革の試み：高校教員向け講座、体験授業、ゼミナール入試を軸にして

松浦克美 (東京都立大学大学院理学研究科教授・同附属高等学校長)

◎高校生による研究発表会 (ポスター)

### (3) 地区例会

第 422 回例会 4 月 17 日 (土) 熊本大学理学部

「天草西岸におけるサンゴの北上について：身近な地球温暖化」野島 哲 (九州大学大学院理学府附属天草臨海実験所)

第 423 回例会 5 月 22 日 (土) 名桜大学 (沖縄生物学会と合同開催)

### 一般講演

- 1) 「琉球列島から初めて発見されたヒルミミズの 1 種 *Holtodrilus truncates* (Liang, 1963) (環形動物・環帯綱) について」\* 藤田喜久 (琉大・非常勤)・川原剛 (琉大・理工学研究科)・諸喜田茂充 (琉大・理・海洋自然)・大高明史 (弘前大・教育)・S. R. Gelder (メイン大プレスクアイル校)
- 2) 「ゴマアイゴ *Siganus guttatus* (Bloch) の性分化過程とその特徴」\* 小松 徹 (琉大・理工学研究科)・仲村茂夫 (琉大・熱生研)・中村 将 (琉大・熱生研)
- 3) 「Different growth forms of young colonies derived from primary polyps and those regenerated from branch of a coral, *Pocillopora damicornis*.」\* Diah Permata W. and Michio Hidaka (Department of Chemistry, Biology and Marine Science, University of the Ryukyus)
- 4) 「オタマジャクシの呼吸法について その 1 ウシガエルのオタマジャクシの呼吸法について」\* 屋比

- 久洋子（沖縄県立那覇西高校）・飯田勇次（唐津市立第五中学校）
- 5) 「久米島と慶良間諸島から得られたサワガニ類の1新種」\*成瀬 貫（日本ウミガメ協議会・黒島研究所）・諸喜田茂充（琉大・理・海洋自然）
- 6) 「瀬底島周辺で観察されたウミシダ類座着幼生と育児嚢を有するユカリウミシダの一種 *Drometra* sp.について」\*小淵正美（琉大・理工学研究科）・藤田喜久（琉大・非常勤）・中野義勝（琉大・熱生研）・上原 剛（琉大・理・海洋自然）
- 7) 「西表島における野生動物の交通事故」\*岡村麻生・外山 茂（西表野生生物保護センター）、齋藤恭子（石垣動物病院）
- 8) 「沖縄島北部におけるオリオオコウモリの生息状況と採餌生態」\*中本 敦（琉大・理・海洋自然）・金城和三（沖国大・法）・伊澤雅子（琉大・理・海洋自然）
- 9) 「沖縄県におけるミカンコバエ根絶後の再侵入と対策—根絶後の再侵入事例—」\*小濱継雄・松永忠久・大野 豪・原口 大（県ミバエ事業所）・久場洋之・松山隆志（県農試・ミバエ研）
- 10) 「沖縄島北部のイタジイ林における樹冠部の昆虫群集の特性について」\*後藤健志（琉大・農）・佐々木健志（琉大・資料館）
- 11) 「沖縄島に生育するナンゴクネジバナ (*Spiranthes sinensis* var. *sinensis* ; ラン科 *Orchidaceae*) の受粉システムについて」筏井さくら（琉大・農・鳥環）・佐々木健志（琉大・資料館）
- 12) 「琉球列島産及び台湾産イリオモテソウ（アカネ科）の外部形態比較」國府方吾郎（科博・筑波実験植物園）・横田昌嗣（琉大・理・海洋自然）・膨鏡毅（中央研究院・植物研究所、台北）・楊宗愈（國立自然科学博物館、台中）
- 13) 「モダマとコウシュンモダマの関係：外部形態と葉緑体 DNA を用いた比較」\*脇田悟寿（千葉大・院・自然科学・地球生命）・傳田哲郎（琉大・理・海洋自然）・仲本・與座優子（久米島町立清水小学校）・来間和菜（石垣市立第二中学校）・梶田 忠（千葉大・院・自然科学・地球生命）・大井・東馬哲雄・邑田 仁（東大・院・理・植物園）立石庸一（琉大・教・理科教育）
- 14) 「河川水の化学組成と森林の影響」崎濱秀明・\*渡久山 章（琉大・理・海洋自然）
- 15) 「中学校理科生物分野の実践例～佐賀県北西部のタイドプールに見られる食物連鎖～」\*飯田勇次（唐津市立第五中学校）
- 16) 「リュウキュウカジカガエルの塩分濃度を利用した産卵場選択」\*原村隆司（京大・理・動物）
- ポスターセッション**
- P1) 「Possible site of angrogen production in the ovary of protogynous grouper」\*Mohammad Ashraful Alam ・ Hiroki Komuro ・ Ramji Kumar Bhandari ・ Shigeo Nakamura ・ Kiyoshi Soyano and Masaru Nakamura (University of the Ryukyu)
- P2) 「両方向性転換魚オキナワベニハゼの生理学的研究」\*小林靖尚（琉大・熱生研）・小林 亨（養殖研）・須之部友基（千葉県立博物館）・長濱嘉孝（基生研・生殖）・中村 將（琉大・熱生研）
- シンポジウム**
- 「やんばるの危機—マンガースの北進とペット問題—」
- S1) 金城道男（おきなわフィールドワーク）
- S2) 長嶺隆（ヤンバルクイナたちを守る獣医師の会）
- S3) 仲地 学（南西環境研究所）
- 第 424 回例会 7 月 10 日（土） 鹿児島大学理学部  
「飾る植物—ジュズダマ属利用の広がりと変容をめぐって」落合雪野（鹿児島大学総合研究博物館）
- 第 425 回 11 月 7 日（日） 宮崎大学教育文化学部  
「サツマハオリムシの生態と関連する他海域の深海生物について」三浦知之（宮崎大学農学部）  
「動物にやさしい河川改修工事の在り方に関する研究」岩本俊孝（宮崎大学教育文化学部）
- 第 426 回 11 月 13 日（土） 佐賀（佐賀大学）  
「ハグロトンボの雄におけるエイジに伴う飛翔能力および生理的形質の変化」松原和也（佐賀大学農学部）
- 第 427 回 11 月 13 日（土） 熊本大学理学部  
「ホンヤドカリにおける配偶行動のタイミング」和田 哲（熊本大学・沿岸域センター・合津ステーション）
- 第 428 回 12 月 4 日（土） 福岡（九州大学理学部）  
「生育環境の異なる近縁 2 種間における開放花への投資量の違い～エイザンスミレとヒゴスミレにおいて～」遠山弘法（九州大学大学院理学府生物科学専攻）
- 第 429 回 12 月 11 日（土） 鹿児島（鹿大理学部）  
高等学校における生物研究成果発表
- 1) 「鹿児島県日置郡郡山町に棲息する淡水魚に関する研究—カワムツの黒色素胞の形態観察と薬物反応

の実験」甲陵高等学校科学同好会 西園将吾、濱田将弘、林利樹、持留良平（指導担当：宇都慎一郎）

2) 「天降川におけるカワゴケソウの分布とその形態（継続研究）」国分高等学校理数科2年（生物班）黒木真仁、是枝祥太、松尾亨、柳村大地、松永智子、山内香里、山崎乃早美（指導担当：宝満浩）

3) 「請島・与路島の生物」古仁屋高等学校生物同好会 長野 誉、龍 洋樹（指導担当：小溝克己）

4) 「珪藻による甲突川の水質調査」鹿児島中央高校生物部 宮元 誠、深瀬拓朗、小長野 淳（指導担当：白須明）

特別講演

「植物—微生物の共生システムとヘモグロビンの関わり」

〔講師〕鹿児島大学理学部生命化学科 内海俊樹（共催 鹿児島大学理学部生命化学科生命機能講座、後援 鹿児島県高等学校教育研究会理科部会）

第430回 12月11日（土）長崎（長崎大環境科学部）

1) 「浦上水源地におけるサギ類の繁殖生態」\* 相原由美・三矢泰彦（長崎大・環境）

2) 「ウシ皮膚可溶性コラーゲンの線維再生機構とその再生線維のヘリックス構造」\* 小野俊雄・馬場友巳・田中一郎・小早川 健・根本孝幸（長崎大院・医歯薬総合・口腔分子生化学分野）

3) 「ケンサキイカ季節群のミトコンドリアDNA解析」\* 満潮隆寛（長崎大院・生産科学）・夏刈 豊（長崎大・水産）

4) 「日本脳炎媒介蚊の吸血行動と宿主動物の空間分布の関係—北ベトナム農村における野外調査の報告」\* 長谷川麻衣子<sup>1)</sup>、都野展子<sup>1)</sup>、V. S. Nam<sup>2)</sup>、N. C. Anh<sup>2)</sup>、N. T. Yen<sup>2)</sup>、T. V. Phong<sup>2)</sup>、H. M. Duc<sup>2)</sup>、高木正洋<sup>1)</sup>（<sup>1)</sup>長崎大・熱研・環境医学部門・生物環境；<sup>2)</sup>National Institute of Hygiene & Epidemiology, Vietnam）

5) 「北限地域におけるサキシマフヨウの分布・生態・形態」中西弘樹・\* 岩城太郎（長崎大・教育・生物）  
第431回 12月19日（日）大分大教育福祉科学部

1) 「裏川のベントスと水質汚染」衛藤宏章ほか4名（大分県立大分舞鶴高等学校2年）指導教諭：細井利男

2) 「大分スポーツ公園における里山林の保全と再生（その2）」須股博信（環境カウンセラー）

3) 「大分の昆虫総観」三宅 武（日本鱗翅学会九州支

部長）

(4) 地区会報

第47号、48号発行（2004年12/31、2005年7/31）

## お知らせ

### 1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

#### (1) 三菱財団自然科学研究助成

①科学・技術の基礎となる独創的かつ先駆的研究とともに、既成の分野にとらわれず、すぐれた着想で新しい領域を開拓する萌芽的研究に期待して女性を行う。

②総額約3億円を予定。1件当たり2千万円以内とし、採択予定件数は40件程度を目途とする。

③平成18年2月3日（金）

④〒100-0005 東京都千代田区丸の内2丁目5番2号（三菱ビル15階）

財団法人三菱財団事務局

TEL 03-3214-5754 FAX 03-3215-7168

### 2. 第26回（2005年度）関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ

恒例の生態学関係修士論文発表会が下記の通り首都大学東京（東京都立大学）において開催されます。この発表会は、本年度修士課程を修了される大学院生に、その研究成果を発表する機会を提供するものです。この発表会では日本生態学会関東地区会の会員・非会員に拘らず発表できます。是非ご参加ください。また多くの方々の御来聴もお待ちしております。

主催：生態学会関東地区会

日時：平成18年3月4日（土）

会場：首都大学東京（東京都立大学）南大沢キャンパス・国際交流会館（八王子市 京王相模原線 南大沢駅から徒歩約10分）

URL：[http://www.tmu.ac.jp/university/campus\\_guide/index.html#01](http://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/index.html#01)

問い合わせ先：首都大学東京・生物学専攻

植物生態学研究室気付け

2005年度関東地区修論発表会事務局

〒192-0397 八王子市南大沢1-1

Tel : 0426-77-2585 Fax : 0426-77-2559

E-mail : kantou\_master@yahoo.co.jp

### 3. 第9回マリンバイオテクノロジー学会大会 (マリンバイオ東京 2006)

主催：マリンバイオテクノロジー学会

会期：平成 18 年 5 月 27 日 (土) - 28 日 (日)

会場：東京海洋大学品川キャンパス (〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7)

発表申込締切：平成 18 年 3 月 15 日 (水) (必着)

予稿原稿締切：平成 18 年 4 月 20 日 (木) (必着)

発表形式：口頭発表 (質疑含み 15 分、OHP、液晶プロジェクター使用)、ポスター発表

大会内容：1. 一般講演 (口頭発表、ポスター発表)、2. シンポジウム、3. 懇親会

一般講演のセッション：以下の 9 セッションを予定しております。①微生物 ②微細藻類・海藻・付着生物 ③魚介類 ④天然物・未利用資源 ⑤バイオミネラルゼーション ⑥マリニングノム ⑦環境・温度適応 ⑧健康食品・機能性食品 ⑨その他

参加・発表申込方法：参加をご希望の場合は申込者氏名・所属及び連絡先 (住所、電話番号、メールアドレス) を、発表をご希望の方は申込者氏名・所属及び連絡先、発表希望セッション、希望発表形式、発表者氏名・所属略記 (連名の方全員)、演題を明記の上、下記の申込先までお申込下さい (電子メールをご利用下さい)。なお発表者は学会会員に限らせていただきます。詳しくは大会ホームページを御覧下さい。口頭発表演題数が多い場合、事務局の判断によりポスター発表をお願いすることがありますので、ご了承下さい。

参加登録費：(平成 18 年 4 月 20 日 (木) まで) 会員 一般 5,000 円、学生 2,000 円；非会員 一般 9,000 円、学生 4,000 円 (平成 18 年 4 月 20 日 (木) 以降) 会員 一般 7,000 円、学生 4,000 円；非会員 一般 10,000 円、学生 5,000 円 (すべて講演要旨集代を含みます)

懇親会：平成 18 年 5 月 27 日 (土) 18 時 - 20 時 (会費 一般 6,000 円、学生 3,000 円 会場：東京海洋大学品川キャンパス楽水会館)

大会事務局、問合せ先：〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7 東京海洋大学大学院ゲノム科学講座内 第9回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会

TEL 03-5463-0174、0556、0689 FAX 03-5463-0690

電子メール：mbt2006@s.kaiyodai.ac.jp

学会ホームページ：http://www.soc.nii.ac.jp/jsmb/

大会ホームページ：http://www2.s.kaiyodai.ac.jp/grad/genome/mbt2006/index.html

一般シンポジウムとして、5-6 課題を予定しています。シンポジウムの企画を公募いたします。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

## 書 評

小野佐和子・宇野求・古谷勝則編 (2004) 「海辺の環境学：大都市臨海部の自然再生」265 pp. 東京大学出版会. 本体価格 3,000 円. ISBN : 4-13-060304-3

かつて関東地区会事業の一つとして「生態学と自然保護」というシンポジウムを実施したことがあった (日本生態学会関東地区会会報 47 号. 1999)。当時の自然保護については、海上の森での愛知万博や東京湾の三番瀬開発問題等、里やまや干潟といった人々とのかかわりの深い比較的身近な自然の保護・保全が社会的にも大きな話題になっていた。このシンポジウムは学会主催で大学を会場としたものであったが、多くの市民の参加があり、活発な意見交換がなされた。そのとき私が感じたのは、自然保護をはじめ様々な地域の問題・課題への生態学・生態学者のかかわりに対する市民からの大きな期待であった。

本書「海辺の環境学」は、生態学、工学、造園学、法学、考古学等、様々な分野の学問・研究及び研究者が一体となって、その社会との接点を強く意識しつつ地域の課題・現状分析と将来展望について取り組んだプロジェクト成果の発信である。

第 1 部「海辺という場所」は、海辺のトポス (小野佐和子)、海辺：すみかの原型 (百原新) の 2 つの章からなり、万葉集をはじめとする古代から近世に記録されている海の様子を紹介する。ここには海辺の原風景ともいえるべき情景が語られ、かつての日本人の海との強いかかわりが示される。そして東京湾岸での花粉分析や発掘遺物の解析結果をふまえて当時の高密な人々の生活の実態に迫る。その結果、縄文時代の湾岸域では、自然に対する豊富な知恵に裏打ちされた人々の生活により、台地上にはクリの栽培、斜面地にはコナラ優占の二次林があり、資源を計画的かつ組織的に管理・利用していた状況とともに、それがカタクリをはじめ多くの野生生物の存続と結びついていた状況を考察する。

第 2 部「海辺のなりたち」は、渚の自然と再生 (小林



達明・野田泰一)、川がつくる海(古谷勝則・高橋輝昌)、海から吹く風(松岡延浩・柳井重人)の3つの章からなり、干潟を中心に東京湾の豊かさとともに周辺の河川流域の地形や物質循環と人々のかかわりについて述べられている。東京湾が周辺の気候におよぼす影響やヒートアイランドとの関係についても論じ、湾岸都市域の自然環境の実態について、河川流域のまとまりと緑地状況に海・海辺・陸域の連続性を加味した総合的かつ一体的解析に迫る。

第3部「海にひらかれた都市」は、陸と海をつなぐ都市のかたち(宮城俊作・宇野求)、海辺とかかわるための仕組み:三番瀬円卓会議の経験と教訓(倉坂秀史)、海・まち育てのすすめ(木下勇)、の3章からなり、都市と海、そして人々とかかわりを考えるにあたり、東京湾三番瀬の問題を中心に、海外や国内の他の事例もおりませながら、自然の保護・保全に市民・NPOがどのように参加し、都市計画に意見を反映させるかを「うみ・まち育て」という言葉とともに解説する。

三番瀬問題については、かつて私自身も県の環境問題検討の委員の一員としてかかわったことがあった。当時の公共事業の検討に関しては、今日ほど全開的な市民参加はなく、会議そのものも非公開であった。しかし、いま思えばそのぶん会議関係者の社会的責任は重大であり、開発側と市民の代表そして研究者とが一体となつての腹をわった膝詰めの議論ができたように思う。したがって、地域の将来と自然保護の整合を真剣に考えていた当時の開発行政の担当者は、三番瀬問題の最大の論点である国の第二湾岸道路計画について多くのデータを示し解説してくれた。このような互いの信頼関係に基づくプロセスで完成したのが、三番瀬環境保全にあたっての土地利用の必要性の再検討を軸にした知事への答申(H13.3千葉県環境会議)であった。そのなかの第二湾岸道路計画についても最新のデータに基づいての交通量予測の見直しの必要が盛り込まれた。しかしその後の新しい知事のもとにつくられた三番瀬円卓会議では、第二湾岸道路に関する論議は棚上げにされてしまった。いくら公開の市民参加でも、そもそもの開発の必要性を先送りした議論は、単なるガス抜きアリバイづくりのセレモニーになりかねない。

自然再生や循環型社会の看板のもと、経済至上主義から抜け出せない日本の頑強な開発プロ集団がいまもなお着々と進める危うい計画に対し、資金・権限もない市民や研究者がいかに対処すべきかの課題はいまも変わらな

い。生態学をはじめ様々な研究成果の迅速かつ明快な情報発信とともに自然保護・環境保全の現場情報の収集・整理、そして将来の人間社会の在りようを的確に見据えた強いリーダーシップがいま求められているように思えるのである。

このような現状を多くの人に感じ、また行動してもらうきっかけとなる書としてこの「海辺の環境学」の一読をお奨めする。

(千葉県立中央博物館生態・環境研究部・中村俊彦)

## 日本生態学会役員一覧

会長	菊沢喜八郎	2006.1 ~ 2007.12
次期会長	矢原 徹一	2008.1 ~ 2009.12
全国委員		
全国区	巖佐 庸	2006.1 ~ 2007.12
	粕谷 英一	2006.1 ~ 2007.12
	工藤 岳	2006.1 ~ 2007.12
	酒井 聡樹	2006.1 ~ 2007.12
	柴田 銃江	2006.1 ~ 2007.12
	嶋田 正和	2006.1 ~ 2007.12
	杉本 敦子	2006.1 ~ 2007.12
	竹中 明夫	2006.1 ~ 2007.12
	中静 透	2006.1 ~ 2007.12
	中根 周歩	2006.1 ~ 2007.12
	日浦 勉	2006.1 ~ 2007.12
	東 正剛	2006.1 ~ 2007.12
	松田 裕之	2006.1 ~ 2007.12
	矢原 徹一	2006.1 ~ 2007.12
	山本 智子	2006.1 ~ 2007.12
地方区	野田 隆史(北海)	2006.1 ~ 2007.12
	占部城太郎(東北)	2006.1 ~ 2007.12
	小池 文人(関東)	2006.1 ~ 2007.12
	山本 進一(中部)	2006.1 ~ 2007.12
	曾田 貞滋(近畿)	2006.1 ~ 2007.12
	波田 善夫(中四)	2006.1 ~ 2007.12
	伊澤 雅子(九州)	2006.1 ~ 2007.12
常任委員		
	石川 真一	2006.1 ~ 2007.12
	齋藤 隆	2006.1 ~ 2007.12
	中静 透	2006.1 ~ 2007.12

	長谷川真理子	2006.1 ~ 2007.12	Franck Courchamp	2005.1 ~ 2007.12
	山本 智子	2006.1 ~ 2007.12	Tom J. de Jong	2005.1 ~ 2007.12
			Raghavendra Gadagkar	2005.1 ~ 2007.12
<b>幹事長</b>	小泉 博	2006.1 ~ 2008.12	Upali Nimal Gunatilleke	2005.1 ~ 2007.12
<b>庶務幹事</b>	津田 智	2006.1 ~ 2008.12		
<b>会計幹事</b>	肥後 睦輝	2006.1 ~ 2008.12		
<b>会計監事</b>	遠藤 彰	2003.1 ~ 2005.12	Sun-Kee Hong	2005.1 ~ 2007.12
	石原 道博	2005.1 ~ 2007.12	Shwu-Bin Horng	2005.1 ~ 2007.12
			Mark O. Johnston	2005.1 ~ 2007.12
			Chul-hwan Koh	2005.1 ~ 2007.12
			Simon A. Levin	2005.1 ~ 2007.12
			Michael A. McCarthy	2005.1 ~ 2007.12
			Helene C. Muller-Landau	2005.1 ~ 2007.12
			Navjot Singh Sodhi	2005.1 ~ 2007.12
			Simon Thrush	2005.1 ~ 2007.12
			Claus Wedekind	2005.1 ~ 2007.12
			Hoi Sen Youg	2005.1 ~ 2007.12
			Hung Tuck Chan	2005.1 ~ 2007.12
			Min Cao	2005.1 ~ 2007.12
			Ping Xie	2005.1 ~ 2007.12
<b>Ecological Research 編集委員会</b>				
<b>編集委員長</b>	巖佐 庸	2005.1 ~ 2007.12		
<b>編集幹事</b>	矢原 徹一	2005.1 ~ 2007.12		
	津田みどり	2005.1 ~ 2007.12		
	井鷲 裕司	2005.1 ~ 2007.12		
<b>編集委員</b>	高橋 耕一	2003.7 ~ 2007.12		
	中野 伸一	2003.7 ~ 2007.12		
	玉置 昭夫	2003.7 ~ 2007.12		
	伊東 明	2003.9 ~ 2007.12		
	梶本 卓也	2003.9 ~ 2007.12		
	関島 恒夫	2004.4 ~ 2007.12		
	市岡 孝朗	2004.4 ~ 2007.12		
	島田 卓哉	2004.4 ~ 2007.12		
	陶山 佳久	2004.4 ~ 2007.12		
	榎木 勉	2004.4 ~ 2007.12		
	佐藤 一憲	2004.4 ~ 2007.12		
	谷内 茂雄	2004.4 ~ 2007.12		
	谷口 義則	2004.4 ~ 2007.12		
	杉本 敦子	2005.1 ~ 2007.12		
	高村 典子	2005.1 ~ 2007.12		
	柴田 銃江	2005.1 ~ 2007.12		
	酒井 章子	2005.1 ~ 2007.12		
	久米 篤	2005.9 ~ 2007.12		
	鎌田 磨人	2005.9 ~ 2007.12		
	鈴木準一郎	2005.9 ~ 2007.12		
	彦坂 幸毅	2005.9 ~ 2007.12		
	金子 信博	2005.9 ~ 2007.12		
	原 正利	2005.9 ~ 2007.12		
	江口 和洋	2005.9 ~ 2007.12		
	Michael Boots	2005.1 ~ 2007.12		
	Barray W. Brook	2005.1 ~ 2007.12		
	Jae Chun Choe	2005.1 ~ 2007.12		
	Tae-Soo Chon	2005.1 ~ 2007.12		
	Richard T. Corlett	2005.1 ~ 2007.12		
			<b>日本生態学会誌編集委員会</b>	
			<b>編集委員長</b>	大串 隆之
			<b>編集幹事</b>	山内 淳
				陀安 一郎
				酒井 章子
			<b>編集委員</b>	齋藤 隆
				近藤 倫生
				佐竹 暁子
				津田みどり
				畑田 彩
				広瀬 祐司
				西田 隆義
				島野 光司
				鈴木 英治
				日浦 勉
				鎌田 直人
				酒井 聡樹
				中丸麻由子
				三浦 徹
				鷺谷いづみ

野田 隆史	2005.1 ~ 2007.12
工藤 岳	2005.1 ~ 2007.12
井鷲 裕司	2005.1 ~ 2007.12
奥田 昇	2005.1 ~ 2007.12
市岡 孝朗	2005.1 ~ 2007.12
宮竹 貴久	2005.1 ~ 2007.12
工藤 洋	2005.1 ~ 2007.12
安井 行雄	2005.1 ~ 2007.12
古賀 庸憲	2005.1 ~ 2007.12
辻 和希	2005.1 ~ 2007.12
彦坂 幸毅	2005.1 ~ 2007.12

#### 保全生態学研究編集委員会

<b>編集委員長</b>	松田 裕之	2003.4 ~ 2006.3
<b>編集幹事</b>	椿 宜高	2003.4 ~ 2006.3
	西廣 淳	2003.4 ~ 2006.3
<b>編集委員</b>	石井 実	2003.4 ~ 2006.3
	梅原 徹	2003.4 ~ 2006.3
	大串 隆之	2003.4 ~ 2006.3
	加藤 真	2003.4 ~ 2006.3
	角野 康郎	2003.4 ~ 2006.3
	倉本 宣	2003.4 ~ 2006.3
	小池 文人	2003.4 ~ 2006.3
	高槻 成紀	2003.4 ~ 2006.3
	高村 典子	2003.4 ~ 2006.3
	館野 正樹	2003.4 ~ 2006.3
	田村 典子	2003.4 ~ 2006.3
	中越 信和	2003.4 ~ 2006.3
	長谷川雅美	2003.4 ~ 2006.3
	長谷川真理子	2003.4 ~ 2006.3
	日置 佳之	2003.4 ~ 2006.3
	藤岡 正博	2003.4 ~ 2006.3
	堀 良通	2003.4 ~ 2006.3
	湯本 貴和	2003.4 ~ 2006.3
	鷺谷いづみ	2003.4 ~ 2006.3
	相生 啓子	2004.1 ~ 2006.12
	小池 裕子	2004.1 ~ 2006.12
	佐藤 哲	2004.1 ~ 2006.12
	中丸麻由子	2004.1 ~ 2006.12
	早矢仕有子	2004.1 ~ 2006.12
	増田 理子	2004.1 ~ 2006.12

#### 自然保護専門委員会

<b>委員長</b>	増沢 武弘：高山・亜高山	2004.8 ~ 2006.3
<b>副委員長</b>	中井 克樹：近畿	2004.8 ~ 2006.3
<b>幹事</b>	立川 賢一：海洋	2004.8 ~ 2006.3
<b>地区委員</b>	佐藤 謙：北海	2004.8 ~ 2006.3
	紺野 康夫：北海	2004.8 ~ 2006.3
	竹原 明秀：東北	2004.8 ~ 2006.3
	佐原 雄二：東北	2004.8 ~ 2006.3
	加藤 和弘：関東	2004.8 ~ 2006.3
	上條 隆志：関東	2004.8 ~ 2006.3
	広木 詔三：中部	2004.8 ~ 2006.3
	和田 直也：中部	2004.8 ~ 2006.3
	河野 昭一：近畿	2004.8 ~ 2006.3
	安溪 遊地：中四	2004.8 ~ 2006.3
	鎌田 磨人：中四	2004.8 ~ 2006.3
	野間口真太郎：九州	2004.8 ~ 2006.3
	逸見 泰久：九州	2004.8 ~ 2006.3
	伊澤 雅子：九州	2004.8 ~ 2006.3

#### 専門別委員

久保田 康裕：熱帯・亜熱帯	2004.8 ~ 2006.3
竹門 康弘：陸水	2004.8 ~ 2006.3
戸塚 績：酸性雨	2004.8 ~ 2006.3
矢原 徹一：IUCN	2004.8 ~ 2006.3
小川 潔：環境教育	2004.8 ~ 2006.3
清水 善和：島嶼	2004.8 ~ 2006.3
井鷲 裕司：遣伝子	2004.8 ~ 2006.3
松田 裕之：生態系管理	2004.8 ~ 2006.3
村上 興正：環境行政	2004.8 ~ 2006.3

#### 将来計画専門委員会

<b>委員長</b>	可知 直毅	2005.3 ~ 2007.3
<b>副委員長</b>	粕谷 英一	2005.3 ~ 2007.3
	巖佐 庸	2005.3 ~ 2007.3
	大橋 一晴	2005.3 ~ 2007.3
	酒井 聡樹	2005.3 ~ 2007.3
	酒井 章子	2005.3 ~ 2007.3

下田 路子	2005.3 ~ 2007.3	田村 典子：森林	2005.4 ~ 2007.3
鈴木 邦雄	2005.3 ~ 2007.3	鎌田 磨人：森林・河川	
辻 和希	2005.3 ~ 2007.3		2005.4 ~ 2007.3
野田 隆史	2005.3 ~ 2007.3	津田 智：草原	2005.4 ~ 2007.3
花里 孝幸	2005.3 ~ 2007.3	高村 典子：湖沼	2005.4 ~ 2007.3
安井 行雄	2005.3 ~ 2007.3	西廣 淳：湖沼	2005.4 ~ 2007.3
山内 淳	2005.3 ~ 2007.3	角野 康郎：湖沼・水田	
湯本 貴和			2005.4 ~ 2007.3
<b>常任オブザーバー</b>		日鷹 一雅：水田・農耕地	
小泉 博	2006.1 ~ 2007.3		2005.4 ~ 2007.3
松本 忠夫	2005.3 ~ 2007.3	波田 善夫：湿地	2005.4 ~ 2007.3
		神田 房行：湿地	2005.4 ~ 2007.3
<b>生態学教育専門委員会</b>		加藤 真：渚・生物間相互作用	
<b>委員長</b> 渡辺 守	2004.4 ~ 2006.3		2005.4 ~ 2007.3
木村和喜夫	2004.4 ~ 2006.3	国井 秀伸：汽水・河口	
嶋田 正和	2004.4 ~ 2006.3		2005.4 ~ 2007.3
林 浩二	2004.4 ~ 2006.3	佐藤 利幸：高山	2005.4 ~ 2007.3
廣瀬 裕司	2004.4 ~ 2006.3	竹門 康弘：河川	2005.4 ~ 2007.3
矢島 道子	2004.4 ~ 2006.3	中村 太士：河川	2005.4 ~ 2007.3
中村 浩志	2004.4 ~ 2006.3	立川 賢一：海洋	2005.4 ~ 2007.3
山村 靖夫	2004.4 ~ 2006.3	向井 宏：海洋	2005.4 ~ 2007.3
西脇 亜也	2004.4 ~ 2006.3	椿 宜高：個体群	
			2005.4 ~ 2007.3
<b>大規模長期生態学専門委員会</b>		松田 裕之：管理モデル	
<b>委員長</b> 中静 透	2003.4 ~ 2007.3		2005.4 ~ 2007.3
小泉 博	2003.4 ~ 2007.3	嶋田 正和：管理モデル	
東 正剛	2003.4 ~ 2007.3		2005.4 ~ 2007.3
甲山 隆司	2003.4 ~ 2007.3	長谷川 真理子：科学技術政策	
占部城太郎	2003.4 ~ 2007.3		2005.4 ~ 2007.3
谷内 茂雄	2003.4 ~ 2007.3	塩坂 比奈子：普及	
三宅 洋	2003.4 ~ 2007.3		2005.4 ~ 2007.3
佐竹 暁子	2003.4 ~ 2007.3		
酒井 章子	2003.4 ~ 2007.3	<b>公開講演会委員会</b>	
田中 健太	2003.4 ~ 2007.3	<b>委員長</b> 石原 道博	
福島 路生	2003.4 ~ 2007.3	大原 雅	
		紙谷 智彦	
		大森 浩二	
<b>生態系管理専門委員会</b>			
<b>委員長</b> 矢原 徹一	2005.4 ~ 2007.3	<b>日本生態学会賞及び宮地賞選考委員会</b>	
村上 興正：自然保護		粕谷 英一	2005.10 ~ 2006.12
	2005.4 ~ 2007.3	工藤 岳	2005.10 ~ 2006.12
中越 信和：景観生態		東 正剛	2005.10 ~ 2006.12
	2005.4 ~ 2007.3		
中根 周歩：森林	2005.4 ~ 2007.3		

#### 論文賞選考委員会

(任期は Ecological Research 編集委員会と同じ)

**委員長** 巖佐 庸  
小泉 博  
Ecological Research 編集委員

#### 学術会議担当

松本 忠夫

#### 電子化検討委員会

**委員長** 遊磨 正秀 2004.10 ~ 2007.9  
**副委員長** 竹中 明夫 2004.10 ~ 2007.9  
久保 拓弥 2004.10 ~ 2007.9  
山内 淳 2004.10 ~ 2007.9  
江副 日出夫 2004.10 ~ 2007.9  
木部 剛 2004.10 ~ 2007.9  
土倉 大明 2004.10 ~ 2007.9  
津田 智 2006.1 ~ 2007.9

#### 事務局整備検討委員会

**委員長** 中根 周歩 2004.10 ~ 2006.3  
**副委員長** 小泉 博 2004.10 ~ 2006.3  
土田 勝義 2004.10 ~ 2006.3  
大串 隆之 2004.10 ~ 2006.3  
松田 裕之 2004.10 ~ 2006.3  
遊磨 正秀 2004.10 ~ 2006.3  
竹中 明夫 2004.10 ~ 2006.3

#### 大会企画委員会

**委員長** 難波 利幸 2005.1 ~ 2007.12  
**副委員長** 竹中 明夫 2005.1 ~ 2007.12  
石濱 史子 2005.1 ~ 2007.12  
石原 道博 2005.1 ~ 2007.12  
占部 城太郎 2005.1 ~ 2007.12  
紙谷 智彦 2005.1 ~ 2007.12  
神田 房行 2005.1 ~ 2007.12  
工藤 慎一 2005.1 ~ 2007.12  
齋藤 隆 2005.1 ~ 2007.12  
夏原 由博 2005.1 ~ 2007.12  
山内 淳 2005.1 ~ 2007.12  
津田 智 2005.1 ~ 2008.12

#### 国際対応委員会

**委員長** 菊沢 喜八郎 2005.1 ~ 2007.12  
大沢 雅彦 2005.1 ~ 2007.12  
大園 享司 2005.1 ~ 2007.12  
北山 兼弘 2005.1 ~ 2007.12  
杉本 敦子 2005.1 ~ 2007.12  
中静 透 2005.1 ~ 2007.12  
小泉 博 2006.1 ~ 2008.12

#### 野外安全管理委員会

**委員長** 粕谷 英一 2005.1 ~ 2007.12  
大館 智志 2005.1 ~ 2007.12  
鈴木 準一郎 2005.1 ~ 2007.12  
戸田 正憲 2005.1 ~ 2007.12  
森広 信子 2005.1 ~ 2007.12  
山下 直子 2005.1 ~ 2007.12  
湯本 貴和 2005.1 ~ 2007.12



京都大学  
生態学研究センター  
Center for Ecological Research  
Kyoto University

京都大学生態学研究センター  
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3  
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201  
センター長 大串隆之

Center for Ecological Research, Kyoto University  
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,  
520-2113, Japan  
Home page: <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

共同利用委員会からのお知らせ

2006年度(平成18年度)京都大学生態学研究センター

共同利用事業公募要項

京都大学生態学研究センターでは、2006年度の共同利用事業の一部として以下の内容のものを公募します。

1. 公募事項

- (1) 研究会: 生態学およびその関連分野での重要な研究課題について、研究結果のまとめ・現状分析・将来の研究計画の作成などを行い、当センターの共同研究の推進に役立つ研究会の企画を募集します。
- (2) 集中講義 & セミナーおよび野外実習: 学部学生・大学院生を受講対象とし、全国に公開されるもので、生態学およびその関連分野において重要だが教育の場が限られる課題についての集中講義 & セミナーおよび野外実習の企画を募集します。

2. 開催期日

2006年5月1日から2007年2月28日までの期間に開かれるものとします。

3. 採択件数

研究会および集中講義 & セミナー・野外実習、合わせて5件程度の採択を予定しています。

4. 応募資格

大学その他の研究機関に所属する研究者、またはこれと同等の研究能力を有すると認められる方とします。なお、企画には本センターの教員の参加があることが条件となります。

5. 申請方法

研究会、集中講義 & セミナーおよび野外実習のそれぞれについて、下記の必要事項を記載した企画書を作成し、郵送、ファックスまたは e-mail にて直接当センターに提出してください。

必要記載事項:

- (1) 申込者氏名・所属先および職・所属先住所・電話・ファックス・e-mail
- (2) 研究会、集中講義 & セミナー、野外実習の別
- (3) 課題名
- (4) 開催予定日時
- (5) 開催予定場所
- (6) 開催目的および内容の概略(400字程度)
- (7) 参加予定者の一覧(氏名・所属)

なお、申請が採択された場合、所属機関(部局)の長を通して、正式の研究会等申請書を改めて提出していただきます。

6. 申込期限: 2006年4月7日(金)必着。

7. 企画書送付先

〒520-2113 大津市平野2丁目509-3  
京都大学生態学研究センター 共同利用係  
TEL: (077) 549-8200 (代表)  
FAX: (077) 549-8201  
e-mail: [kumi@ecology.kyoto-u.ac.jp](mailto:kumi@ecology.kyoto-u.ac.jp)

郵送の場合は、封筒の表に「共同利用事業企画書在中」と朱書きして下さい。

#### 8. 選考

当センターにおいて 2006 年 4 月中旬に行います。

#### 9. 所要経費

研究会の出席者、集中講義 & セミナーの講師の旅費、場合によってはその他必要経費の全部または一部を、当センターにおいて支出します。1 件について 20 万円以内を予定しています。

ンターに提出して下さい。なお、提出された報告書は、その全部または一部を当センターの業績目録に掲載します。

(2) 共同利用事業によって得られた成果を論文等により発表する場合には、京都大学生態学研究センター共同利用事業の援助を受けた旨を論文等に記していただくようお願いします。また、別刷り 1 部を当センター共同利用係宛に提出してください。

この公募内容につきまして、不明な点がございましたら、当センター共同利用係に御照会下さい。

#### 10. 報告書および論文の提出

(1) 共同利用事業終了後、1 ヶ月以内に報告書を当セ

### 協力研究員 (Guest Scientist) に関するお知らせとお願い

京都大学生態学研究センターでは、全国共同利用の一環として、学内外の研究者に協力研究員の委嘱を行い、その活動を推進しております。さて、2004 年 4 月以降に発令された協力研究員の任期は、2006 年 3 月末で満了となります。これまでのご協力に対して厚くお礼申し上げますとともに、引きつづき協力研究員としてセンターの活動にご協力頂ける方は、誠にご面倒をおかけして恐縮ですが、同封の申込書をご送付ください。また、新規の協力研究員も広く募集しておりますので、周りの方々にも声をかけていただきます様、お願い申し上げます。なお、協力研究員になられた方には、センター長より委嘱状を送らせて頂きます。

協力研究員の方々には、センターの各種共同利用事業への積極的な参加とご協力をお願いするとともに、論文などの公表の際に、生態学研究センターの協力研究員であることや施設を利用したことを、謝辞などに記載していただくことを希望しています。次回の任期は、2006 年 4 月から 2008 年 3 月までとなります。申し込みを希望される方は、同封の用紙に必要事項を記入の上、3 月 20 日までに Fax または郵送でお送りください。なお、協力研究員の申し込みには e-mail は利用できませんのでご注意ください。

#### 1. 京都大学生態学研究センター全国共同利用に関する申し合わせ

(1) 全国共同利用のセンターとして、生態学及びその関連分野に関し、次の項目について共同利用を実施する。

##### 1) 共同研究

生態学の特別研究プロジェクト及び共同研究、個別共同研究

##### 2) 共同利用実験施設等共同利用

野外研究施設・大型機器等を利用する実験、研究

##### 3) 施設利用 (ビジター・システム)

##### 4) 研究会・野外実習・集中講義並びにセミナー

##### 5) その他

(2) 上記の目的達成のため、必要に応じ招へい外国人学者を受入れ、協力研究員・その他を委嘱することができる。

#### 2. 京都大学生態学研究センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ

(1) 生態学研究センター (以下「センター」という) の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。

(2) 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。

(3) 協力研究員の任期は原則として 2 年とする。

### センター報告

1) 2005 年 10 月 6 日に第 42 回運営委員会および第 52 回協議委員会が京都大学百周年時計台記念館にて開催されました。

2) 2005 年度外国人研究員の Teresa C. Balsler 氏 (客員研究員) は 7 月 31 日で任期を終え、帰国されました。





◆入会手続

入会希望の方は、学会 HP (<http://www.esj.ne.jp/esj/>) 入会案内より入会用フォームに所定項目を記入し、E-mail でお送りください。E-mail を使用されない場合は、下記のフォームを Fax または郵送してください。あわせて、会費及び地区会費を所定の口座にお振込下さい。

日本生態学会 入会用会員カード送付先：  
〒 606-8148 京都市北区小山西花池町 1-8 日本生態学会事務局  
Fax : 075-384-0250 E-mail : kaiin@mail.esj.ne.jp

**【日本生態学会 入会用 会員登録カード】**

氏 名 (漢字) : \_\_\_\_\_ 男女 : \_\_\_\_\_

生 年 月 日 : 西暦 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

会 員 種 別 : 一般・学生 [A・B・C] (学生証番号 : \_\_\_\_\_ )

氏名 (カタカナ) : \_\_\_\_\_

氏名 (ローマ字) : \_\_\_\_\_

E-mail : \_\_\_\_\_

所 属 先 : \_\_\_\_\_

所 属 先 住 所 : 〒 \_\_\_\_\_

電 話 : \_\_\_\_\_ ( ) \_\_\_\_\_ FAX : \_\_\_\_\_ ( ) \_\_\_\_\_

自 宅 住 所 : 〒 \_\_\_\_\_

電 話 : \_\_\_\_\_ ( ) \_\_\_\_\_ FAX : \_\_\_\_\_ ( ) \_\_\_\_\_

雑誌・会費請求書送付先 : 勤務先・自宅 入会希望年度 : \_\_\_\_\_ 年度より

専門分野 (18 字以内) : \_\_\_\_\_

## ◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

会費滞納2年で会誌の発送停止となり、3年で退会処分となります。

## 会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布	Ecological Research + 生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿*	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

\*Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しない。

## 地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200円 東北地区：800円 関東地区：600円 中部地区：0円

近畿地区：400円 中国・四国地区：400円 九州地区：700円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail office@mail.esj.ne.jp